

ル 3  
3208





門 凡 3  
號 3208  
卷 1340

此書ハ天地開闢ノ一ヨリ皇朝國郡ノ始元興廢土地ノ寒暖山川ノ風  
土往古天子ノ武或ハ諸國武士ノ強柔民ノ人氣風俗言語ノ訛スベテ  
坤輿漏サズ輯録ス故ニ博覽ノ資トモナリ大ニトル時ハ脩身齊家ノ模範  
トナスベク小ニトル時ハ温故知新ノ談柄トナリ看官一度卷ヲ開カバ  
終日坐右ヲ離ツテ得ザルホトノ珍書ナリ

# 大日本性氣錄

有造館藏梓

國郡  
風土  
日本性氣錄叙

國家之理亂。繫風俗之美惡。風俗之美惡。繫  
民心之情偽。民心之情偽。繫人牧之賢否。是  
故移風易俗。王者所以挽回也。嗚呼風俗之  
所繫。蓋大矣哉。今此編者。往昔述  
之風俗者也。或曰。副元帥時賴所著也。願為  
其書。不能頗無疑焉。然非周流海內。而檢察  
民情者。不能若是詳且盡矣。方今盛時。風移













皇九代崇神天皇十年此邊夷王化又帰せざりし久大彦命と中陸  
に遣し武渟別命と東海の子倭津の命と西の丹波乃皇命と丹波乃  
小遣し征伐せしむる五年四道の將軍各討平げて帰陣凡〇十代景行  
天皇十二年筑紫の熊襲と云者王命と叛く親征ありて明年これと平け  
られ宮より崩きして筑紫と治め十九年戊寅小還幸ありて廿五年熊襲又  
叛きしを皇子小碓命后は日本武尊と稱す討伐せしむる四年己亥東夷乱  
を治す中日本武尊乃令し征伐せしむる尊伊勢より東出むるに  
如悉く后伏す進て相摸りて熊の四又後り此時風濤大りて船覆没る  
と云る竊姫捕姫の事り是恐らくは純神此崇すしん妻の事と贊はるる  
言就てて自海に投す暴風なち中ち止船恙に海路を轉じて東征す夷賊

日本列島

竹の水門とて防戦ふとらども尊の神武を敵しがく皆降ふして連  
は平定す尊乃陸より甲斐の酒折此宮に暫居すし又は信濃越  
の國險阻と憑て令に急せばより甲斐武上野と云確氷の坂  
て兵と分吉倭津夫と越路又遣し尊ハ信濃より美濃に出く吉倭は  
彦乃命し其乃尾張ふりりゆり好候ふは微なりゆり何又妖神有る  
巨蛇と化て乃又伏る一雌きりてその毒霧は中り三毒瘴がごとく  
山とせり山下の氣を飲と得て醒固てそれ氣と成世醒て身とら后御  
心地例すし守候は能廢跡とて崩れぬ帝源く歎きりて廿三年性  
志征路を巡幸有るは五年於又帰しせり六月五十七年丙辰都を近江志賀  
よ遷す〇十三代成務天皇此期は國造を置けり國々國造の官を祀















と元の大倭と凡（やま）○四十六代孝謙天皇天平勝宝四年（しやうしょう）まゝ佐渡（さた）と建（た）て十寺（じゆ）と  
 淵（ふみ）又（また）菱刈（しやうき）と並（なら）○天平宝字元年五月能登（ののの）安房（あふ）和泉（いづみ）の二寺（に）四（よ）と再（また）建（た）  
 同九年此は大倭と大和（やまと）又（また）改（か）む（ま）同八月武藏（むさし）と並（なら）新羅（しんら）と並（なら）  
 ○四十八代稱徳天皇神護景雲元年十一月法興（ほふかう）と並（なら）粟原（あしはら）と並（なら）同二年佐藤（さとう）と並（なら）藤野（ふぢの）  
 武（む）和（わ）和（わ）同十月河内（か）内（の）と並（なら）河内職（か）手（て）職（しやく）同四年八月又河内（か）内（の）又復（また）す宝龜二  
 年十二月筑前（つくの）と並（なら）停（と）てお宰府（さいふ）又（また）屬（ぞく）す（す）同後（のち）同十六年九月筑前（つくの）と並（なら）攝津（せつ）  
 四年法興（ほふかう）と並（なら）多賀（たが）階上（か）の二郡（に）と並（なら）同七年六月佐藤（さとう）と並（なら）盤梨（ばんり）と並（なら）同十二年三月  
 攝津（せつ）と改（か）め攝津（せつ）と并（なら）同十一月山城（やましろ）と改（か）め山城（やましろ）と并（なら）同十六年九月筑前（つくの）と並（なら）  
 廢（た）し又（また）宰府（さいふ）隸（り）し（す）右（みぎ）宰府（さいふ）ハ（ハ）法西（ほふさい）府（ふ）也（也）同十八年三月法興（ほふかう）と並（なら）富田（ふち）と並（なら）邑麻（い）小（こ）併（あ）  
 讚馬（さんば）と並（なら）新田（しん）又（また）併（あ）登米（と）と並（なら）小田（こ）又（また）併（あ）今（いま）新田（しん）小田（こ）とも併（あ）登米（と）ハ（ハ）今（いま）登米（と）と改（か）め同十九年十月出羽（で）同  
 日本口一七

秋田城（あきた）と停（と）めて同寺（じゆ）○五十代平城天皇大同元年七月紀伊（きい）小（こ）安堤（あ）城（じやう）有田（う）  
 同二年五月又筑前（つくの）と並（なら）同四年九月又佐藤（さとう）同神野（か）と並（なら）新居（しん）と改（か）む  
 ○五十二代嵯峨天皇弘仁二年正月法興（ほふかう）と並（なら）和（わ）我（が）韓（かん）貫（くわん）斯波（しば）の二郡（に）と並（なら）  
 同十四年二月越前（えちぜん）と並（なら）江沼（え）加賀（か）の二郡（に）と並（なら）加賀（か）と並（なら）同建（た）江沼（え）と改（か）め能美（の）  
 同並（なら）加賀（か）と改（か）め石川（い）と并（なら）○五十三代淳和天皇天長元年九月多禮（た）同  
 停（と）て大隅（おほし）と並（なら）隸（り）す（す）又（また）於（お）て同名（な）六十六國（ろくじゅうろくに）と並（なら）定（さ）まり（ま）る（る）永（えい）き（き）同代（だい）ふ（ふ）か（か）ら（ら）り（り）と並（なら）  
 ○附記  
 人皇（ひと）十二代垂仁天皇廿五年天照太神宮（あ）と伊勢（い）勢（せ）五十鈴川（い）上（か）に（に）祀（い）蓋（が）し（し）上古太神  
 始（はじめ）て降（くだ）り（り）ゆ（ゆ）の（の）地（ち）今（いま）内官（うち）の地（ち）あり同十八代履仲天皇四年始（はじめ）て史官（し）と並（なら）諸國（しよ）に（に）置（お）  
 政良（せい）の得夫（と）と祀（い）四方（し）乃（の）志（し）と達（た）し（し）同廿二代雄略天皇廿二年豊受太神  
 同常（と）立（た）尊（そん）と丹波（たん）より（より）佐藤（さ）の山田（やま）又（また）近（ち）今（いま）宮（みや）  
 と祀（い）る（る）所（ところ）



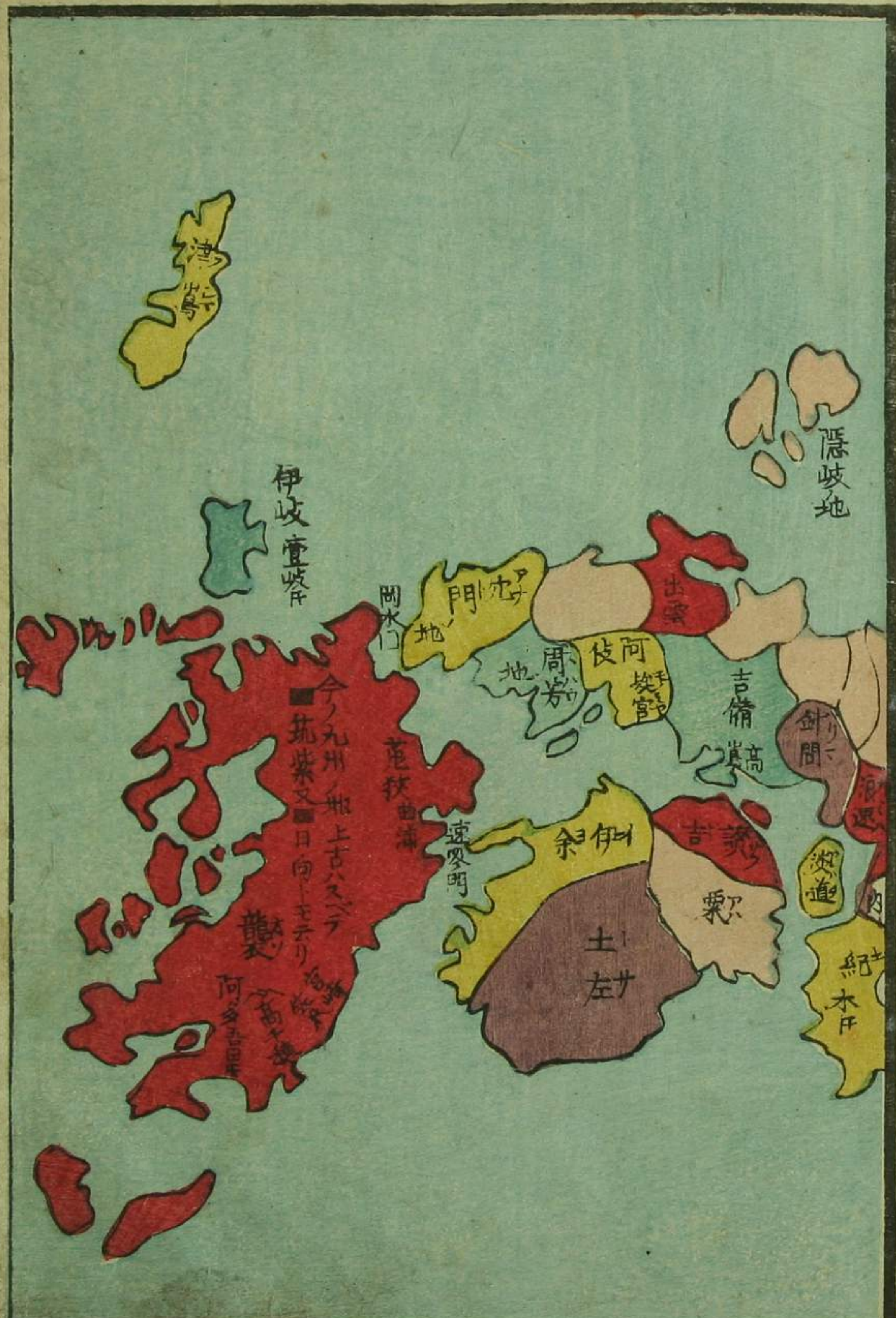
日本往古の圖

神武即位年

珍彦ヲ大倭

ノ國造トス

帝東征ノ時  
海路ヲ導  
シ功賞也





其二

東奥ノ夷地

武内大臣ノ言ニ

日高見ノ國トアリシハ

沃野ト云意ニテ廣キ

良田アル地ヲイフ也



七代孝靈五年

駿河ノ國富士山

湧出近江ノ國

湖水開





其三

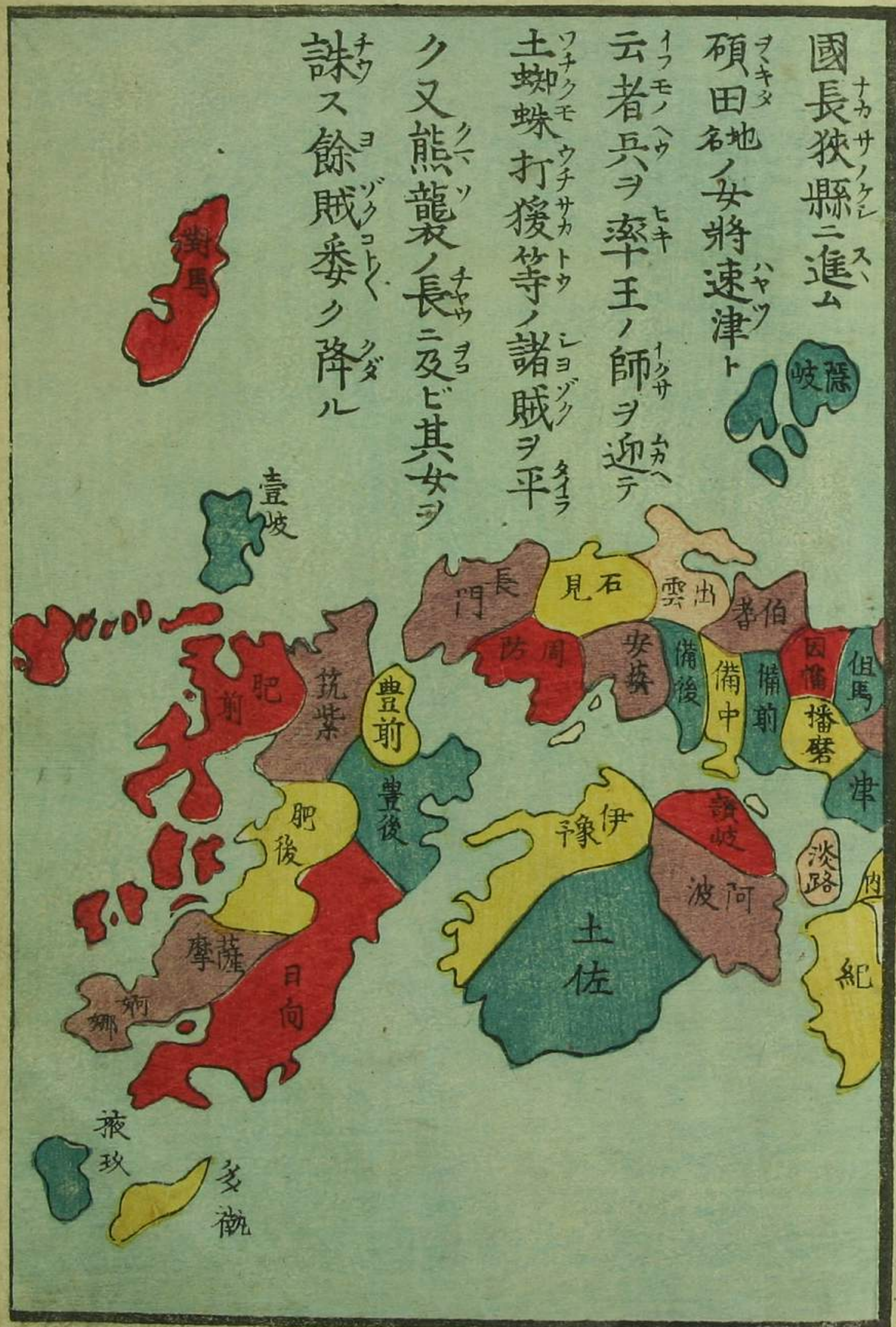
人皇十二代景行帝十二年

熊襲ノ郡名叛キ九國

亂帝親征周防ニ至ル本國ノ

女賤神其磯部落ヲ率テ降ル

用ヒテ郷道トシ師ヲ豊前ノ



國長狹縣ニ進ム

碩田名ノ女將速津ト

云者兵ヲ率王ノ師ヲ迎テ

土蜘蛛打獲等ノ諸賊ヲ平

ク又熊襲ノ長ニ及ビ其女ヲ

誅ス餘賊委ク降ル

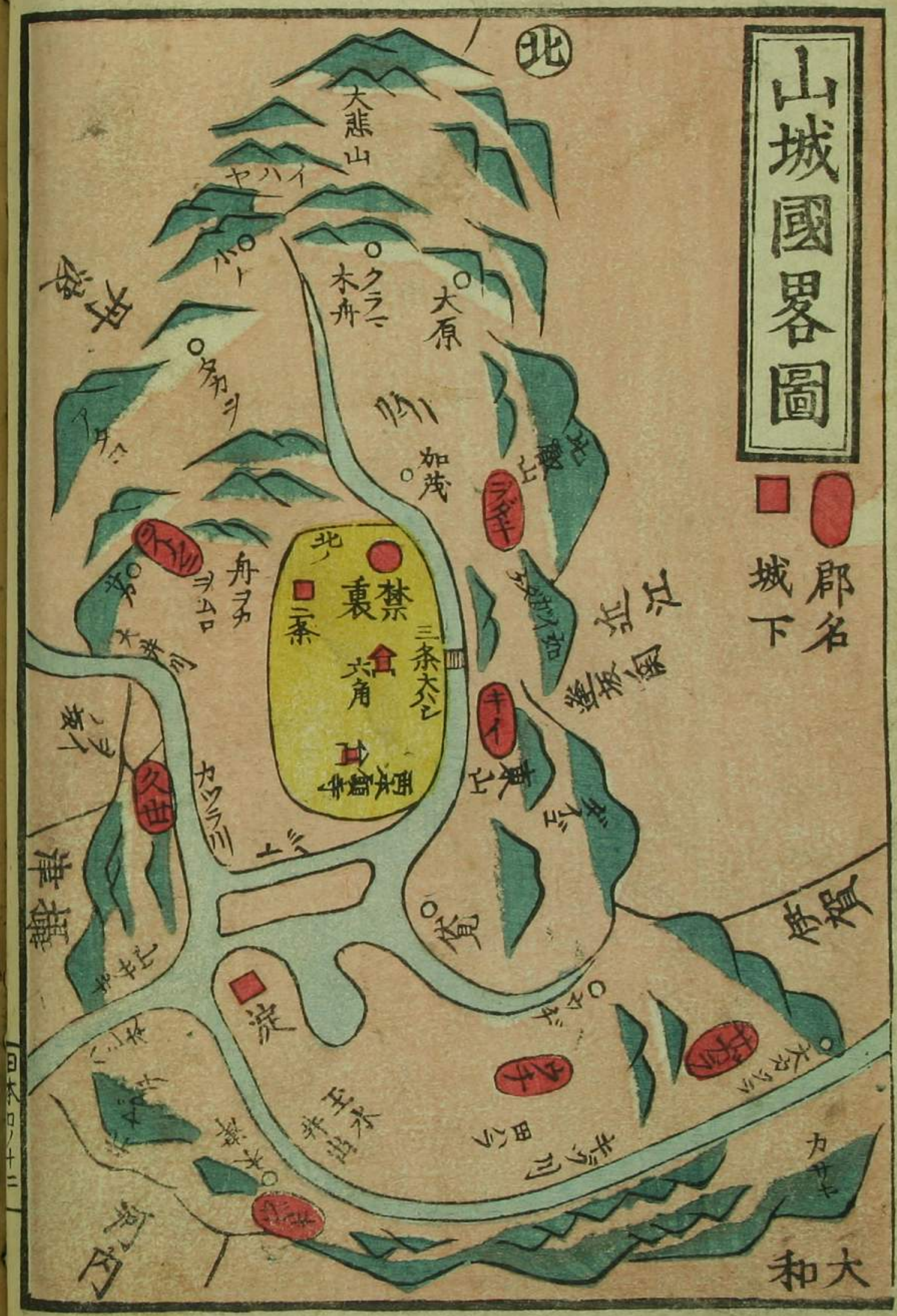






山城國畧圖

郡名  
城下



國郡 日本性氣録

五畿内

山城 當國の風俗ハ男女ともに其相自清濁合を遣て。たぐハ流水ハ浄るこ流して。いさだよれが如し。風俗は其西の水土よらふりあり。け國の水ハ深こと他國よらふりあり。故又人の膚滑る。婦人の容若くは尋者あり。拙きども。武士ハ風俗ハ柔るこ不堅がれた婦人脱菴の常とのくハ路よ抄しむぐら。古來玉城のゆらあるよゆらよ。その山々んよゆらつてふ知



ふ織又奢美ふと云。実美少と云あり。これ又依人と  
交又肯こと易く。又約と変ることも有と云。煙房の  
意ありゆへと云。

○按又尚事云。三方山圍て南水田を開。南依して  
中に平地あり。則平安の都ありて。四神相應の地。四  
國の寧暑。名正氣を以て。ゆる知也。故人の風俗。本  
書又巫祝の如し。生質自知と中正と云るあり。我  
と云も。一國の内少も。南山。東海の。少ありありと云。  
物中山中へ心契あり。是源遠の若育ふまを云

如此されども國風の道まごらん。風流の情尋ありと云。  
國中に日ト

**大和** 常國の風俗。表野人の名。名刺を好むの如し  
奥郎の者。強る氣有り。山城の風俗。大梁似あり。され  
ども少尖する所もあり。又烟又俗を巧みと云。功少と云。  
名氏掲むと云。山契あり。故に実美と云まありて少  
し。其中芳野山中に人あり。若列あり。五彦肉と云  
まて潔白されども。智孫ありと云。美花と云。又ありと云  
唯彩傳と不隔。奢美と不好のまありと云



○按又高木らるる山ありて中平地と異く。本虫は所謂表那といは平地の所なるの故糸などの色を云あり。南の大山度ふ大孝と云く甚しに涼山あり此國人皇才一神武天皇と云く都をたてしれより代と此郡と云れるゆへは國俗其規模より自然と名功の氣變あり。本書より後より野宮院との山中。風俗名別は卒速たり。四因の寒暑も表那ら山城ともも然溫和をり山中へ見せ各別をり

河内

當國の風俗は上下男女ともに氣柔なり。然るも如く然るも。土着工高とも又富むる人。然るも。他人と云んを心あり。上河内へ山嶽あり。下河内丹南縁。石川の敷。智恵ありて。連み。たのり。れり。少く。卑劣なり。風あり。とて

高木ら東南山ありて。他低地。沼水田多し。西の方。異く。海風を。入。故。又。溫和。なり。て。風俗。柔。なり。寒暑。も。暖







のそとにきつて。四ヶ國の水土集令を一國されど。又若くもこれ  
あり。熱く柔弱虚憊の風也と云ふべしとぞ

○按に、高國ハ南ニ海濱と云けやハ皆山あり。難波は、  
古より。入津集令の地あり。四時の室ノ暑暖皆存と云  
本書又如流の民俗。これ皆海濱が令の故あり。お  
とら。能勢郡。有る郡のりりり是等。丹波の國ふつ  
て。風俗も。海をこゝろ列あり。さるるも國風ハさぬが  
緒國運送の酒を醸。そ外賣賣の利得と。第一のりり  
下氏ハらぬおり入る風あり

### 東海道

伊賀當國の風俗伊勢はむと等し。下伊勢の國ハ  
詳あり。されどもさるる一ハ各地の若とともあり。それ  
風。かぎりぬきとく。根の遠ることされとあり

○按に高國ハ四方皆山あり。川も亦おろし。室  
中ハあり。民俗本書の新況今もたがをす

伊勢當國の風俗。南北各別あり。南伊勢の人。其心ハ  
よりて他とる。益小。漆とてぬりて其と。令根の毛とる  
まゝとる。穢とる。種とる。山場の人ハ同







か海とすじした。今の國地の浮勢の塊内より。當處へ  
されたるけし地物なりとぞ。風俗修勢にあらざるまこと  
直するべし。室を暑を暖氣なる國あり。

尾張

當國の風俗の進歩の氣はよくして。若くも

そとをも。其方へうのしを深るゆゑなり。人の上を刺さるも。  
一向に我をこしとせかんとし。人の若を消。我を掩のれ  
多し。又乃事根のどづるゆゑ。徒に大風洪水の暴は  
うり出がどく。どくむゆと。退くことすやあり。誰か

だた常氣あり。きいした西もりまは。修加仔勢志

摩三ヶ國會てもふ及よてなり。古より秀の者もあはと

るくろ。下考の心算。形ゆとくをえ。吏ゆ人係及

一揆を敷るゆも古今昔なり。まき飾氣とく形は

に方不実義の人も出るなり。又更とすくも。とすく

先と懲しと。改る人も出るなり。其の中の風俗の心と

つるべ。男は言借さるやふしと。よ死むるなりとぞ

○按よも國に南水長東あ技。少く山ありとく一玉



く陸地あり南の海濱相成るき後ある國より國民  
巧方なる所あり風俗本書不詳なり

參河常國の風俗。乳膳て人の長十に八九のひ守。其言  
續り申けまども。實名おし。夏秋物して遂なるり  
ちし。親子は間も。互まゝぢらしひ。虚後なるりなり。  
我とも。編屋ありて我とまゝて人の言とまのいれず  
ありふりて合とまゝなるものも河これあり。武士乃  
風儀若ありして女もさるるがふ。恥とるるなり

○按に高國の少く山あり海濱とて。其地廣く。平原  
曠野あり。寒暑温和なり。人の心も寛大なり。尚  
ふも。山中の少異なりども。風俗亦古よ而流るるに  
遠江常國の風俗。三河と不異とて。人の氣何より  
はれてもひろむ氣あり。さるる山ありて死守なるありや  
るるるえん。常よりさるる河と人ども。人よりえん三州  
に習ふるあり。あやれよとるる氣あり。これふよりて  
編字ありとれえんあり。唯己が智とりのあり







○梅小嵩も亦少い山。南ハ海。最山多寫士上峯  
負く。大河お存。寔著中ふく。温暖乃  
季あり

甲斐 常國の風俗人の死ありて不置又死する  
多とふ麻傍若無人の多あり。上り下りあり。不  
亦とて不殺下賜に少科あり。人甚得之を  
人非たよりとほくべ。大蛇の早垂及之。小蛇の怒り  
會て。禍を移ぐ人悲む。及ばを免げしむるも

甚強勇にて死を不顧戰場のをさうたけり多ありとて  
○按は高申を偏地の山中あり。殊小南小坂土山霞く。  
一系よりぬのこのれりあり。心山係がゆへに水源あり。  
四寸の空暑も不正氏係本書又統てく不正風あり  
されば武田伝云云の曰。最明寺殿の人國紀とてふ  
丹後石見の風俗千人万人の内ふも。若人稀とて不置  
ありと後述し。余が領土甲斐の民も。是よりあつる  
あつた。不正風ありとて



伊豆 常國の風俗は強中其強なり。其風俗と云ふは、  
清なり。ふるまひども一花の如く。少の遠めども。又親戚  
瓜裂くる形りやとて

○按に高岳の後河と相摸のるは海中。南へ移出たるを  
三方皆海岸なり。中山岳あり。空も暑も暖なり。其  
氏俗偏概するゆへ。万一とどまり。大徳に宅あり。そ  
外俗も良し。其ハ文俗の如きは固く庸と云ふ人も風俗  
各異なり

相摸 常國の風俗は豆みに似たりといふ人も人の如く  
愛易さるなり。粟也。極て来て親を去り。今日より  
眼し人も。因て不得勢ありぬまのをさる。其人  
の能と揚て清里 控柄ある人など能とも控り極  
す。其食を好て。粟嚙ふまらるるありと相り。如  
凡十人より八人あり。其友も。主被友のそらなり  
たが其勢に依りて。昨日まで肩と云ふ。一者  
も今日までと竹。主ハ被友とあり。被友も一人あり



公恥ざりけ風をり。智られども。却て智又迷ひる。公  
知るふ似く。美るのれをり。とぞ

○按に高必の山と負。海は抱。而も風土異なり  
故客も暑も亦別あり。鎌倉の如き海濱の客も異  
平正あり。箱根三塔の山中の客も亦不し。民俗大  
庭本書の如く。不美也。海濱の如く。風土異なり  
おの

武藏常國の風俗ハ。俗達ハ。と。氣度。と。秘蔵

乃器ののて。過て換むる因。其者思極むれば。其も人  
却て是を厭がも。後悔の氣をさく。其者と受て情  
と保くこと。名人の風あり。因茲戰場より。利を不  
て。故軍のといへども。敢て其も不願して。後て散  
乱の兵士。集て。再會戦の志あり。凡れ不  
手にあくること。雲泥の遠といへども。亦もひつ  
も。因をさる。故より。後軍の後。再功をさる。因  
をさるべし。又し。人々。兼て制する。此れも有る



ぢれが一際よ。は風なるも。後ととどくす。又瓦度  
ゆへに孫の系象なりとぞ

○按よ高岡を。あつ山深く。あまの海と交。度大の  
國あり。古昔の武義跡とて。曠原相續く自人の心  
を信氣をう。今江都の大城ありて。諸國都會地  
なれば度氏皆そよお。是亦奢るの風を長せり。稜  
又山中れ如く。本質の古俗あり。態若竹葉をま。上  
瓦の瓦よ不長。寒暑中正の肉。休を於地有り。烈

風考ふま

**安房** 常國乃風俗々。人の氣尖るるも。發へ。又の如。  
常に頑あり。く人も和らるるも。寡男女とも。死を恐  
ど。惟令れ兼令も。互又齒をぬれ。万々に思案工  
夫をることあり。其中にも。又能質する者も。出果え。  
言清く。卑劣なき。生得の。及理あれば。一旦尖ふ  
られども。武士の。其程の。益りの。とる。者工高七夫  
それよ。力量。りる。それとも。如けの。災亦。希る。り







るしの人ども。心身ともおりのたに却て病と心て不死と  
て子孫先と赫徳と。盜賊のあつたことと方不知  
と胆と大よ生れつた方のたより。武士此風も是れ  
うはしと。乃程と知る人少。後乃程を知ると人ども我  
ちよ任せて孰れや。又程又知る程不也。又知る  
まきと。若ととどくく世の場も曰。若産の必令  
ましと。我ども咄言の味方。今月の款とあるごとく  
のましく風あつたこと

○按に高玉。ある一偏海洋ありて。あつた山あり。は海  
圃中にうへへ。雨は北風去各異あり。む大玉の如  
に山中海濱南山の塊地。又寒暑のあつた民俗  
本著よ。はまびくうあり

### 東山道

近江常國の風俗。賢達相交する風あり。それども  
賢のうへに少傷あり。多うへに身持とまはして己が  
相と強して若とてふ。さうふうのく外より見と見



しん。け國の人の地あつ風は拂てんありあり。これ瓜  
好みに金のほどにま令ふ品あり一黄金なり白銀を  
銅銀錫鉄は金よりして各其性異なりけ玉の風  
金の内にも金銀とてちりちりに散り候の事あり  
うべしとあり。賢も候も其方のとてさきん。され  
らやうれがなりとて

○接又高麗の山川多中に大に氷と凍て氷水と令  
集ると必くと南山東の風土少異なり此山をふん

き空に雲を係し。亦偏傳。東へ去報より南へ高麗の地  
あり。寒暑ありきあり。風まことげし。民俗本素  
伎のまなり

美濃 常國の風俗人の意地奇麗ふしく。水晶のどく。され  
ども水晶も磨がれぬ。光沢なり。磨るとまわり光出たり  
が如く。牛乳水晶なり奇麗しくも其よりして其積ま  
て果のなり。あまの風の系系又言流も風流ふりゆり  
るり。東は露なり。牛乳の木の地なり。日本は内四五ヶ國乃



能風俗なり。唯生得のまゝありゆへに連なるりて之を聲勢  
あるものも同これあり。はるかの風と能坂と。廣うバ名をえ  
人もいできそ外の法別ともなるべしとぞ

○按又當必の大國あり。お東の山原あり亦山ありと  
あり用廣原水田多し。亦昔飛驒又はくゆへて大  
水匠ありて。川堤あり。流あり會流して停勢北海  
に流るれ入。室暑山中あり又おとくは。南のありて  
中正より風俗を書又伝ふ。直なる民俗なり山

中へ大險阻の地あり。其民む都煙本變あり

**飛驒** 常國の風俗ハ健直あり。是なり。日本ハ廣也

いども我必に如くありとあり。地必此事もはし  
の中此地大海を志しざるごとし。是是ありあり可  
謂。生得ハ石候の性なり

○按又當必ハ。東南南の山あり。若間の民家あり  
を。人の心狭。地又偏る氣あり。是連なり。然るも  
古昔飛驒の工とて帝都の壽延。此國より貢す。







**上野** 常國乃風俗ハ。確氷吾毒利根ニ類ハ俗又  
 似テ。勢田佐佐新田行ハ四郊ハ俗亦ヨリモ上野の  
 風ナリ。然モモ法所の意地少シ。故ハ吾々客不  
 ありて推心する所。小ニモ大罪又る所ナリ。俗ハ  
 不忠。予若を取ども。負ても氣を不屈必は死を志  
 ありて。安んずも出陣し遂く。以ぬハ。二三友も死結く  
 不利ハ能分列として。若くは中々の氣象ナリ。志ハ  
 中人志ナリ。又邑樂歌多甘樂多胡蝶那彼

山田等の數郡ハ。一季勢ありて。一人氣をなげません  
 諸人衆をひと山よして。一黨する氣象ナリ。進  
 退人々をいさむ風ナリとぞ

○按又尚必も山谷多ク其大田あり。山源より  
 流水亦如也。山入の所。險阻要害ナリ。故東  
 の山内中々地形多ク廣大ありて。開く地もあり  
 也。又上野の山と云ふや。山入を皆守りて。民俗  
 本書の所從の如く。人心堅固あり志するに上り



盗と流るるを頃中を旅客の脅令を奪取  
猥よ人を殺害するや此風有りて世人これ公悪あり  
こと皆常事なる所あるらん。今四海昇平に  
して人心皆善よ向き人よ彼盜賊の風も改り  
て本國の生得よありぬと云く事なり

**下野** 當國の風俗おもく清の内は濁と交る人  
多きてこれを澄するも不能して邪事甚傷若  
人なり。かゝる由は平生は切強盜をい少し恥  
るる紙不知。欲心深るるは是るくして。而も己も悪と  
ありまざる改るるもされ法を惡風俗ありとぞ

○按よ當も山多陸奥よはくく人亦寧民俗も  
野鄙あり。怪俗を紀す

**陸奥** 當國の風俗ハ日本北偏鄙なる也。人の氣也  
結て。常貨の倚突るると万丈の岩壁と云るが如し。  
遠道程を知ても。茶瓶を改むるあり。好云ハ水乃  
流滞。塵埃積て清むるもされ。固之者人と呼程也



人不<sup>く</sup>字<sup>は</sup>流<sup>る</sup>ま<sup>り</sup>。右<sup>は</sup>の生<sup>け</sup>得<sup>る</sup>る<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>へ</sup>。その<sup>り</sup>れ<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>も<sup>り</sup>り。  
又<sup>は</sup>ち<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>け<sup>る</sup>る<sup>れ</sup>風<sup>も</sup>あり。五<sup>は</sup>十<sup>は</sup>四<sup>は</sup>部<sup>の</sup>内<sup>は</sup>も<sup>二</sup>ワ<sup>三</sup>の<sup>は</sup>又  
風<sup>俗</sup>の<sup>め</sup>り<sup>り</sup>め<sup>ら</sup>ま<sup>ど</sup>も。大<sup>は</sup>樞<sup>は</sup>は<sup>は</sup>振<sup>る</sup>り。は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>日<sup>乃</sup>  
め<sup>と</sup>ゆ<sup>へ</sup>に。色<sup>白</sup>ゆ<sup>て</sup>眼<sup>青</sup>と<sup>也</sup>。人<sup>の</sup>形<sup>相</sup>家<sup>継</sup>  
て。言<sup>は</sup>語<sup>早</sup>考<sup>な</sup>れ<sup>ど</sup>も。常<sup>に</sup>見<sup>る</sup>日<sup>本</sup>に<sup>比</sup>亦<sup>も</sup>あ<sup>る</sup>ま<sup>ど</sup>。  
固<sup>之</sup>也<sup>蓋</sup>の<sup>死</sup>然<sup>と</sup>る<sup>者</sup>り<sup>り</sup>。但<sup>は</sup>偏<sup>僻</sup>なり<sup>と</sup>の<sup>也</sup>も<sup>其</sup>  
意<sup>地</sup>也<sup>白</sup>ある<sup>所</sup>あり。女<sup>の</sup>容<sup>貌</sup>見<sup>る</sup>色<sup>白</sup>髪<sup>長</sup>く<sup>顔</sup>る<sup>か</sup>。  
但<sup>は</sup>形<sup>ね</sup>青<sup>髪</sup>と<sup>な</sup>れ<sup>り</sup>。部<sup>考</sup>る<sup>り</sup>。あ<sup>ら</sup>れ<sup>ど</sup>も<sup>其</sup>心<sup>意</sup>の

貞<sup>正</sup>なる<sup>こと</sup>。外<sup>の</sup>男<sup>子</sup>に<sup>も</sup>傍<sup>り</sup>ん<sup>ぬ</sup>尚<sup>も</sup>及<sup>び</sup>出<sup>羽</sup>上<sup>野</sup>下<sup>野</sup>  
野<sup>と</sup>総<sup>下</sup>総<sup>常</sup>法<sup>等</sup>。大<sup>槩</sup>人<sup>の</sup>音<sup>多</sup>と<sup>細</sup>子<sup>あり</sup>。  
あ<sup>ら</sup>る<sup>ゆ</sup>へ。倭<sup>執</sup>る<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>も<sup>り</sup>。若<sup>し</sup>尚<sup>も</sup>あ<sup>る</sup>も<sup>と</sup>。大<sup>く</sup>も<sup>不</sup>勤<sup>也</sup>  
る<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>も</sup>。思<sup>ふ</sup>意<sup>を</sup>別<sup>の</sup>海<sup>に</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>。殊<sup>は</sup>は<sup>は</sup>國<sup>壯</sup>麻<sup>那</sup>  
載<sup>麻</sup>南<sup>階</sup>上<sup>津</sup>野<sup>字</sup>多<sup>敷</sup>部<sup>の人</sup>。別<sup>て</sup>楚<sup>忽</sup>の<sup>所</sup>  
ら<sup>ま</sup>う<sup>ら</sup>る<sup>風</sup>き<sup>り</sup>と<sup>ぞ</sup>

○按<sup>よ</sup>尚<sup>も</sup>大<sup>國</sup>なる<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>へ</sup>。亦<sup>は</sup>此<sup>の</sup>風<sup>去</sup>なり<sup>。然</sup>れ<sup>ど</sup>も  
凡<sup>山</sup>お<sup>の</sup>る<sup>國</sup>なり<sup>。氏</sup>依<sup>を</sup>書<sup>き</sup>得<sup>る</sup>なり<sup>。今</sup>は<sup>は</sup>白<sup>川</sup>







慨然として。惻きなり。そふ不仁なるより。實は夷狄の  
風なり。體は仁風のを及ぶるや。殘忍の俗なり  
て。今其より。ちり。とぞ

**出羽** 當國の風俗は。奥州は。大槩めたるより。ちり。とぞ  
ども。奥州より。も。健養する所なり。智も亦上り。武士  
の忠孝の志あり。て。巾を使ひ。法を。少。信し。下。藩の上  
と。う。や。す。ふ。心。なり。百姓の地政を。お。ひ。心。の。あり。て。互。は  
家。地。政。を。め。ん。ず。た。の。の。き。あ。む。我。を。を。偏。去。に

て。外。は。向。ひ。を。う。へ。た。の。の。こ。も。と。人。々。お。り。方。の。人。に  
鬼の風俗なるなりとぞ

○接よ。當國を。あ。は。向。ひ。て。る。必。う。と。東。の。限。を。た。深。山  
險。阻。あり。て。甚。寒。し。雪。も。亦。深。し。奥。州。は。又。は。は。は。を  
大國なり。が。あ。て。美。なる。風。も。なり。氏。俗。本。書。に。傳。へ  
海。色。の。風。の。あ。て。陰。風。なり。人の。害。鬼。言。借。據。て  
卑。劣。なり

北陸道



若狹 常國の風俗は。人の相和するところ。意の  
御あり。昨日の騒がりたる中も今日も疎らる。其  
と参る風あり。中々と。とを放。己が科と云ふれど。  
は却て人の不法のやうに。云々せり。此は利をなす  
友持苗の多吉。一花の繁榮はあれども根の遠る  
あり。三方知らぬ人の風おひくやを

○按ふ苗は少く向い海濱をうけ。む山で負ふは  
只一室の國や又その山々人の心根と云うがごとし。

風俗はもとの室國あり

越前 常國の風俗は。日本に双たれた智恵も有り。上下  
ともにとどれり。舟吉尾州も考まきさる。後之高  
怪あり。地を地ある。怪あり。一且みりれり  
と。信水はれり。或は旅人の後りよりかき。舟  
か。し。信の言やと云て舟ご。又信り者の考  
不及。宿と求むれどもはれり。如く風も中  
人あまね。於智多きと云つべし



○按ふ尚ふも少ぬふ向ひあつるも山深く。平原も多  
き國を深。流水も中に通じく。万より自由なる國  
ある所人の心も世のくさるる終り。山川深  
く。寧烈のまあるも人々の智さうらう。あられ  
ども。小方の偏家と稟るゆへ。正智あしく和智ま  
あまよ云。あやう。けふ深風うたふ才一たうど  
教賀郡の。風を亦列うら。

**加賀** 當國の風俗は。上下ともは風を隠して虎を密に

持風より中にも。は隠能る列て如けし。石川川水の  
勢は。あしきまのびあうら。武士の風は。こころやう  
くて。尖るるあうら。武勇此功と。秀りてよ毒たご  
免の上の洞美と。うらと成まんとあうら。あま  
花園は合致あうら。まればり助勢と。あまらうても  
自承と金しく。あうらと不好まうて我持の外とを  
て切れたうと。あうらと盗賊うらと。あまらうてあま  
物とく。あまらうの風をう。それども物と極意あうら。風を



○我國一かうて志中人采ありとぞ

○按、尚國ハ南海より向ひ山を負て東おひきするむろり。氏俗温和なり。本書又倭より寧風をげしつども裁希なるハ老唐一

能登 尚國の風俗ハ人の心列て狭くして海に地更足端出せば湯令にひるべしと云り。周之至人より此をく使つとつども外より子と得んはく。是れを勅ゆるり。志うれども氏唐の是俗よりとぞ

○按、尚國ハ如智越中其間より。亦海へ一歩あるに於て巡りてを演進中ハ山あれども極く狭く土地亦心窄く風烈し

越中 尚國の風俗ハ陰柔其内ハ智けり。雲けり。倭より親するの同くても一言ふとを貸せぬ。巧小倭をうらする。人の交も。虚言の侮あり。たが率勿のまうりの中よりとる志地なり。志うれども徳めて不厭死風もなりとぞ



○按小治山。山海經云。又海之北。室之北。言係一氏。俗本云。又釋之。

**越後** 常國の風俗。勝りて。再乳多。惟令中。常と。痛れ。と。か。め。た。と。云。若。磯。を。れ。痛。と。は。と。只。云。た。と。が。ま。あ。あ。と。い。け。る。者。の。育。あ。も。う。り。ら。う。と。強。く。を。敷。る。風。あり。勝。と。る。も。い。お。け。れ。ど。も。に。か。ま。の。は。た。た。れ。ど。い。後。友。の。志。ま。り。て。不。考。と。る。と。後。者。は。ま。と。み。り。な。れ。ど。も。た。理。を。り。た。ま。る。の。事。

さう。それ。ゆ。何。の。事。も。あ。い。て。携。ん。と。て。理。解。の。分。別。さ。れ。ま。う。と。い。ふ。

○按小治山。大國と。出。水。東。品。は。た。た。れ。山。係。と。て。あ。い。海。と。う。け。ら。る。中。大。河。多。く。室。も。い。り。烈。者。大。な。係。と。上。越。後。下。越。後。少。の。習。り。て。下。越。中。室。烈。土。地。も。ま。と。野。野。と。り。一。中。下。氏。携。心。と。い。ふ。今。小。不。愛。氏。俗。本。書。に。る。也。

**佐渡** 常國の風俗。越後と似て。乳多と。伸中と。



みあり。心憂痴み。極く。頑固。武常ハ強  
とる人も。若し一が

○按ニ高玉ハ戦後能電の間の仲中ホシ海あり  
宇風烈雪降。氏信心狭。本去ハ詳あり

### 山陰道

丹波常國の風俗ハ人の家懦弱あり。而も各  
己と自慢し。人の恥を恨。人の是を非と云。消以。ひそ  
婦人の心根あり。百姓ハ農業を事とせ。一

日本書紀

高賈とねよて。身の履有と求。熱く雪氣とくほして  
編はよく。此日の味方も今日故とあり。世後身一の風  
そありとぞ

○按ニ高玉ハ四方山とて。皆若乃の人家あり。宇  
雪も。山玉ほといふれども心烈。山谷の内民  
あねが偏屋とせ。うらむらむらなれども。本書ハ説と  
く懦弱なる所あり。山玉城は隣て。勢は迫ぐや  
上邦の風俗と。見よ別く。母のうらむの情出。本



強の災と失へり。婦人の風俗一入死しむはて。殊末るる処あり

丹後 常國の風俗は。上下男女とも。万人の内ふ一人  
好人なり。不慮あり。宗強却る。常氣の寡一適  
常らぬ。智多し。若又實ある者ハ。意味あり。  
用ふ不堪とぞ

○按ふ常國ハ。少海と云けり。南ふ山を。負り入海  
多くして。洲の溫和又。別まら。む家と氣られども

小陸よ不及あり

但馬 常國の風俗ハ。丹及より。少より。出石氣多城  
倚二方の。敷強ハ。実ありて。たのり。た。去地あり。相  
善又の。風ハ。去地き。盗人。禁。あ。丹の。風  
中かあり。若も。後ありとぞ

○按ふ常國ハ。土地の大。丹後。但馬。丹後  
より。丹部。四時。暑も。丹後。丹後。國  
ハ。風あり



因幡 常國の風俗ハ八上智頭色美の三郡ハ寧ろ  
志て而も常なりて約と不憂の草氣多法味巨渚  
の救効ハ倭あり。和智あり。武士利欲又拘得  
此傳く方又後風あり。一玉の内ハ如け風俗の憂。徳  
又天性自然の理ありとぞ

○按又常玉ハ海とくつるものども。南亦山深  
美の玉よりも。たちこめりたる玉あり。寧ろ此  
より。民俗海濱と山岳といひまの玉も憂矣

りるなり

伯耆 常國の風俗。とくく虚実ハ未だ。其人ハ定て己  
と若て。若心まじりて人ども。其人と誰てハ又憂心  
ト申に。兎角建國の地ハ若く定る心終まじり  
これ今世ハ世の流ハおの執り又まじりも無  
とれど。三日候とつるもの。此玉の風より始り云  
て勤ず勤も怠ハ常氣も定るなり  
○按以常玉の風去も固ハ又似れども從海濱



氏俗を書けり

出雲 常國の風俗はるるの地業実を不勤て夫と少

とす。風俗れども丹雲北谷を休めり。其理と不

云。愚邪心とも併神よ約て加儀とたのそとす。凡

る。謀計の罪は南。心連の癖を氣神へ肥れと不

心連の首は中とる。心と不知意味の心ありとぞ

○按は南の山を真海と抱て空風あり

石見 常國の風俗は丹後の山に不異して然る後して

日本書紀

実なる人希なり。若くは好風俗あり。智る者ハ

只愚心と巧む言俗たりの玉ありとぞ

○按は高玉の。西水の海は向て山々押まほしり玉之

寄るも烈し氏俗を書けり。山谷の秀氣は

受る也。上下智恵さし。又狼山の風移りて信

巧の風あり

隱岐 常國の風俗は。桑弱ありて放逸あり。知夫一

のそ実をあり。そのそゆるあり。其余の風あり



系れど一若魚又不拘むし死法は風より飛去  
を傳ふるれども石がよりなり。もろうよの風とを  
○按まひお雲品と去るう二十ちを小海中に傳る  
寄雪を甚し

### 山陽道

**播磨** 常國の風俗は。智恵なりとて義理を不知。親の  
子と親しむる親と欺まひ彼官小領地と少くして  
て好人を有りあり友とこそなり。彼友も亦老幼を

日本書紀

二風ありて個性を心示知を得るるをけり。是れ備  
盜賊の振也。侍の中へ不及。是れ北風系なりとを  
○按ま高玉の南よの海を受山は厚くよとの風  
去るなり。寄雪者温和ありて。万の宿右のむらり。氏  
俗本書に示流のごくあり。風去の順氣とるる  
とつども憂患よせり。安楽よ死の乃理よて。その  
ゆゑ神忍とるるあり。実よ古昔の武士  
も赤松黨が如く皆利心をより出く。本書の所



習不及是惟と云者うまぐし

美作 常國の風俗は卑劣ありて敵の源一。存云が

人の物を借て。夫と不返と却て手拍ふとするや此風

斥る地ありて人の教訓を笑み入ず。輕智まらせり。

此を文とされとも其中にもたし中へさかたれりあり

をたのりし石取らふまされりとぞ

○按よ當をい。山陰山陽の間より海ありて。山を

穿てて海にたどりしうらむ

備前 常國の風俗は。上下ともこれ。利根を先じて。万

民を以て依り。言外のお遠きるよりおわし。別て備を強

くして。上より下への好むれば。いひて。内心のこころ

くはさげすむ候なり。主人を威と強て下を治る人

んら。彼官のまを。敷肉の皆私心をておりてを

術風なり。志うれどもおて智恵ある生。雙と云

飾風されば。みす年も後ら。まこと若と云ら

て風を。あつよなるべきうらとぞ



○按に尚玉の山入深く及びて。海濱と抱くを云  
室に著るも中和を得暖玉あり

**備中** 常國の風俗に於て、玄地に於て。上下男女とも  
に膏氣有りて。美理の所、所寸玄者よあり。されども  
ふてぬる心ゆへに乃程よふ由りあり。但彼處  
傍の思ひ不正はくろひの風ありとぞ

○按に尚玉及彼後とも。彼處と一玉を。古く古彼の國と云  
へども。彼處よりい。け玉の山入遠く深し。室に著る日あり

**備後** 常國の風俗に、生處実美あり。物と暖玉あり  
あり。されども、其處より、乃程よふ由りあり。但彼處  
傍の思ひ不正はくろひの風ありとぞ

○按に尚玉の三玉の肉と云へ。一の大玉あり。石海を  
りれども。山入深く及びて。彼處の形不なり。中著  
海濱と暖氣あり。山中に玉あり

**安藝** 常國の風俗に、生處実美あり。風俗にも、自然  
と較して。諸人ひいて。人を先づく人の若くとも



判<sup>せん</sup>どるるりあり。己<sup>おのれ</sup>こが一<sup>いち</sup>をとちる風あり。後<sup>のち</sup>に援<sup>えん</sup>群<sup>ぐん</sup>は  
 人<sup>ひと</sup>より。昔<sup>むかし</sup>の朝<sup>あさ</sup>と暮<sup>ゆふ</sup>とをわけるたれや。秋<sup>あき</sup>にけりたやう  
 されも。庭<sup>にわ</sup>の空<sup>そら</sup>の雲<sup>くも</sup>もよりの記<sup>しるし</sup>も。若<sup>わか</sup>くも。殊<sup>こと</sup>に  
 依<sup>よ</sup>り田<sup>のり</sup>賀<sup>が</sup>茂<sup>の</sup>の人<sup>ひと</sup>住<sup>すま</sup>あり。二<sup>ふた</sup>を長<sup>なが</sup>表<sup>あは</sup>裏<sup>うら</sup>の風<sup>かぜ</sup>さ  
 ○梅<sup>うめ</sup>小<sup>こ</sup>尚<sup>なほ</sup>必<sup>かならず</sup>にむ海<sup>うみ</sup>辺<sup>べ</sup>にたれども。二<sup>ふた</sup>方<sup>かた</sup>山<sup>やま</sup>がこゝ南<sup>みなみ</sup>も  
 海<sup>うみ</sup>山<sup>やま</sup>よりしと秀<sup>ひで</sup>る自<sup>みづか</sup>もよりのたれども。是<sup>こゝ</sup>に並<sup>なら</sup>  
 の國<sup>くに</sup>と風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>各<sup>おのづか</sup>別<sup>べつ</sup>ありと見えたり。む暖<sup>ぬく</sup>氣<sup>き</sup>多<sup>おほく</sup>なり  
 山<sup>さん</sup>陽<sup>やう</sup>乃<sup>すなは</sup>ち秋<sup>あき</sup>に暖<sup>ぬく</sup>温<sup>ぬる</sup>なるまなり何<sup>なん</sup>者<sup>もの</sup>南<sup>みなみ</sup>の四<sup>よ</sup>宮<sup>みや</sup>の大<sup>おほ</sup>

日本書紀六

山<sup>やま</sup>あり。少<sup>すく</sup>山<sup>さん</sup>陰<sup>かげ</sup>の山<sup>やま</sup>と霞<sup>かすみ</sup>。中<sup>ちゆう</sup>に海<sup>うみ</sup>の潮<sup>うしほ</sup>はつる自<sup>みづか</sup>  
 然<sup>しか</sup>と風<sup>かぜ</sup>を和<sup>なご</sup>けり。民<sup>たみ</sup>俗<sup>じやく</sup>にまこと一<sup>いつ</sup>也<sup>なり</sup>中<sup>ちゆう</sup>に風<sup>かぜ</sup>をふたれり  
**周防** 常<sup>じょう</sup>國<sup>こく</sup>の風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>に健<sup>けん</sup>美<sup>み</sup>なり。これども古<sup>ふる</sup>教<sup>きやく</sup>依<sup>よ</sup>波<sup>な</sup>  
 於<sup>お</sup>於<sup>お</sup>三<sup>さん</sup>於<sup>お</sup>於<sup>お</sup>。養<sup>やう</sup>理<sup>り</sup>寡<sup>か</sup>。唯<sup>ただ</sup>日<sup>ひ</sup>まぐ肩<sup>かた</sup>を並<sup>なら</sup>べり者<sup>もの</sup>あり。仕<sup>し</sup>  
 合<sup>あ</sup>ふらまむ。ま若<sup>わか</sup>と行<sup>ゆ</sup>風<sup>かぜ</sup>あり。大<sup>おほ</sup>嶋<sup>しま</sup>玖<sup>く</sup>珂<sup>か</sup>態<sup>たい</sup>乞<sup>ぎ</sup>三<sup>さん</sup>於<sup>お</sup>の  
 人<sup>ひと</sup>とあひあふら少<sup>すく</sup>まきなり。さゆども情<sup>じやう</sup>落<sup>らく</sup>の方<sup>かた</sup>みけり  
 風<sup>かぜ</sup>あり。毎<sup>まい</sup>人<sup>ひと</sup>希<sup>まれ</sup>あり。無<sup>な</sup>きも亦<sup>また</sup>少<sup>すく</sup>し然<sup>しか</sup>ども也<sup>なり</sup>小  
 中<sup>ちゆう</sup>に強<sup>きやう</sup>忍<sup>にん</sup>するなり。とぞ



○按又高木の海辺より。志山を真ぐも深ぐはる。暑蒸るよひとく

長門 常國の風俗は。万々に足敷るるもの。人の声も下きよ。と個ふるもの。人はあはるれも。一足踏て音る風あり。よよ人のあはる。をきこる。何を勅とらども。をよひ疾けれども。其まき忘情の業ある。因茲武士の風俗若と云が

○按又高木の少あめの海と云ふ。志山を南中海邊

ありといふども。まきん法氣をゆるむもの。そのまきを風烈しくやも亦山陰不揃

南海道

紀伊 常國の風俗は。不佳き才一なり。陽氣を結く。よよと令。よよと令。法令と不用物中。年婁日多。在田穀は。我慢あり。志地を強きると。只くは又弱しく。結る所の業を不極む。昨日款とる。人今も今白の候は。又先々矣矣あれ。己一ちの一揆と令乃



邦あり。はゆへや郷に名を彦司と号して。一たり。  
 主君とまら。佐美の礼の付よりも。皆侍らふ儀は  
 け風といふ事なり。仔細名料那賀海部の人の  
 事部よりいふ事なり。我ども是れ是れ是地のこ  
 して。是も侍りしる心を研もきし。又是とまら  
 いまよきとていふ事なり。故の海にこ。  
 日本に双玉ありは。只利口と面筋より。實事  
 事もなり。友仔友丹石員ヌケもよは。是地強

○ 接し海部の大國なり。と。但海部なり。心算所  
 の海山もりつとつとも。と。海部の南は四つ  
 あり。風は吹く事なり。桑和の氏居たり

淡路

常國の風俗は。是地の風あり。人の氣健なり。お  
 りも仍なり。是れは。親族縁者とまら。其筋りを  
 一。飯食を可れ者とも。と。糸索の風なり。  
 されども。と。魚情からなり。と。退屋の  
 みなり。武士も実事あり。是れども。達人の出入り



にんあしき

○按小當山。紀伊河波のる此海中に修るる四辺  
みる海あり。む山あり。地皮廣う。ざ方むる南  
方の人を暖むりて。民俗柔弱あり。志平なるを  
とむも。孤修るるあり。実者ありと云ふ

阿波 當國の風俗は。大庭元健あり。智のりる  
智のりるあり。夷人あり。も衆あり。人となぐり。か  
強盛と云ふ。船のしるあり。む。地は。勝浦

那賀 板野河波。夷人あり。細軟と云

○按小當山。海濱。東山。南海あり。む。地は。勝浦  
夷人あり。東方の秀れ。受るあり。も。地は。勝浦  
あり。

讚岐

當國の風俗は。元健。智人あり。武士の風

烈て。強く。方後あり。む。地は。勝浦  
大内。室川。二本。聖山。田。等。数。郡。列。て。風。あり。む。

○按小當山。む。海。と。文。あり。む。



伊豫 常國の風俗ハ。大形中分とに列是。東七八部也。  
宗賢柔なり。実を強く。死に死に弱く。氣強く。却実ハ  
おくえものなり。古よりけむの海城備て往來の舟と  
あやせぬのう。ま及ふよ。不遠。今もちを徒黨成  
まき。一所を立ち候ま。傳は関東の強盜は玉の海  
城下ノ業あり。武士其風俗一處で成り。こつとも其  
乃吟宗なり。たよりまの風なり。末の世とてしけ  
風變とまき。きとを

○按小高必大國あり。むほと熱し。かまかふ風  
養も亦とあつたり。む暖温の玉あり  
土佐 常國の風俗ハ。拙て其ありて。宗賢とるとる。  
去他長岡吾川の強。別てけ風なり。多嶽ふも。風の後  
るものつや。けむの猿とらふなり。蒸を仕つけよたこ  
但を必ゆへ。其流云早候なりとを  
○按又高必ハ大必あり。百里の溪はがたあり。山ま  
多し。志南海と交けり。るむなり。かまかふ温暖なり



西海道

筑前 常國の風俗なり。大庭飾多し。人々各々の心あり。常も一色に勤まじき。かざる風也。後よりふとも成就せざ。但九品よめびりし。花奢の國なり。酒を每人おぼし。親疎の厚くして。我々あふ得ある人よちるもさぶら風と。甚不て然とぞ。  
○按小當由のあて交て。山も亦多し。風土溫和にして。暖氣あり。古昔に大宰府とて。九國の官

儀の友府ありて。是とあ類ともいひし。物中博多の隣に。吳王の船津ありしゆへ。外の至よりの風氣かりり。人の生得方とけり。はつとをのどきやうなる者あり。むとさうのうし風ともあり。筑後 常國の風俗なり。筑勢ふかり。実多し。若くは理と後ト得失を述べし。費を情を言結し飾り鮮矣。然ども。下人の一涯うして。理能とらぬ人あり。く。吾侪のよのそあり。なまが其堅固なるより。鉄石と



つども。こねの鉄もあつて。石のごとく其煉ること  
あつて。これにて二を合するなりがごとく。よる者も。は  
風より少し和ありと云ふべしと云々

○接は南玉筑紫の隣とつども。入海と云けて。大さ  
山田より必なり。かまゆ風も別なりと云ふなり  
を温後の國なり

**豊前** 常國の風俗。必なるごとく。るふ名るなり。世  
るなり。まての毛ふあり。長きく。換ふなりと云ふ

結ぶれごとく。我ども世なるなり。用ひごとく。あつなり  
るふはまを世なるなり。世なる。まわり。止あり。昨を  
踏あり。そ世なり。中なるなり。さればは玉の風も  
唯中なるのごとくあり。ま実なるなり。ち地なり。  
死生と論ざる場ふなり。ても世を不知あり。ねを  
程と持て命を惜むのぐる者あり。されば一事の  
念よ。一念に持る者あり。あれどは程よ。心を用るなり  
の不運風と云ふなり







あけきびをりしとぞ

○按ふ尚ふの海濱もまろ。山若もあはれ人國うりむ  
暖氣のふされども日長るをよりいへ。山中へお寄し  
氏儀本書又説とそり洋あり。中比大友の自負を  
るるに大槩本書よ不遠風を多し。物子とまびく  
らふるの尚ふよりぞ。九段の内雨とい風あり  
よしあり。本書に聖徳太子おとすびくと宣  
いし。何の書ふのぞしや。縦出家をせて人なるは

まびくともふとも。是天た自負の人論と喊却とるや  
らうすや。ましてや。産ふれ父母の心う。其子と殺害  
とるる。夷狄食飲ふし。かぎや。慈仁の悲風  
ま及は風交れさるるとも。志やん人をも。忍れ煩て  
國俗の生愛へうへらるる。姑むを

肥前常國の風俗ハ山陰と合ふるよ。山陰常國あり  
て。武原にありて。あつて。ひるむきは。律其まの風  
去す。ゆらと云ふ。百人又二人。は風くられば。この



外<sup>ウチ</sup>の<sup>ウチ</sup>り<sup>り</sup>〜<sup>り</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>り。武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>の<sup>の</sup>風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>心<sup>しん</sup>如<sup>ごと</sup>け<sup>け</sup>只<sup>ただ</sup>温<sup>ぬる</sup>和<sup>やわ</sup>の<sup>の</sup>志<sup>こころざし</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ざ<sup>ざ</sup>ら<sup>ら</sup>ん。と<sup>と</sup>所<sup>ところ</sup>敷<sup>しき</sup>り<sup>り</sup>め<sup>め</sup>ど<sup>ど</sup>も。主<sup>しゅ</sup>君<sup>くん</sup>の<sup>の</sup>乃<sup>のみ</sup>子<sup>こ</sup>會<sup>かい</sup>と<sup>と</sup>拵<sup>つくりかた</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>考<sup>かんが</sup>へ<sup>へ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>。而<sup>しか</sup>に<sup>に</sup>町<sup>まち</sup>人<sup>ひと</sup>男<sup>おとこ</sup>女<sup>めづこ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>こ<sup>こ</sup>不<sup>ふ</sup>通<sup>つう</sup>罪<sup>つみ</sup>科<sup>か</sup>を<sup>を</sup>死<sup>し</sup>す<sup>す</sup>玉<sup>たま</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>。毛<sup>け</sup>改<sup>か</sup>令<sup>れい</sup>と<sup>と</sup>拵<sup>つくりかた</sup>む<sup>む</sup>事<sup>こと</sup>家<sup>け</sup>臣<sup>しん</sup>。風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>の<sup>の</sup>佐<sup>さ</sup>州<sup>しゅう</sup>又<sup>また</sup>同<sup>どう</sup>し<sup>し</sup>。智<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>寺<sup>てら</sup>也<sup>なり</sup>野<sup>の</sup>都<sup>と</sup>あり又<sup>また</sup>人の<sup>ひと</sup>和<sup>わ</sup>を<sup>を</sup>考<sup>かんが</sup>へ<sup>へ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>佐<sup>さ</sup>州<sup>しゅう</sup>の<sup>の</sup>及<sup>およ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>考<sup>かんが</sup>へ<sup>へ</sup>た<sup>た</sup>り

○按<sup>お</sup>よ<sup>よ</sup>高<sup>たか</sup>玉<sup>たま</sup>の<sup>の</sup>大<sup>おほ</sup>玉<sup>たま</sup>を<sup>を</sup>考<sup>かんが</sup>へ<sup>へ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>殊<sup>こと</sup>又<sup>また</sup>高<sup>たか</sup>玉<sup>たま</sup>小<sup>こ</sup>隸<sup>れい</sup>と<sup>と</sup>考<sup>かんが</sup>へ<sup>へ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>少<sup>すく</sup>づ<sup>づ</sup>の<sup>の</sup>智<sup>ち</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>れ<sup>れ</sup>が<sup>が</sup>も<sup>も</sup>考<sup>かんが</sup>へ<sup>へ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>海<sup>うみ</sup>濱<sup>はま</sup>也<sup>なり</sup>。山<sup>やま</sup>と<sup>と</sup>又<sup>また</sup>水<sup>みづ</sup>

日本四書

む<sup>む</sup>氣<sup>き</sup>玉<sup>たま</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>。氏<sup>うぢ</sup>依<sup>よ</sup>本<sup>ほん</sup>書<sup>しよ</sup>に<sup>に</sup>詳<sup>しょう</sup>あり<sup>り</sup>。中<sup>ちゆう</sup>古<sup>こ</sup>龍<sup>りゆう</sup>造<sup>ぞう</sup>寺<sup>てら</sup>隆<sup>りゆう</sup>俊<sup>しゆん</sup>の<sup>の</sup>乳<sup>に</sup>玉<sup>たま</sup>能<sup>のう</sup>小<sup>せう</sup>風<sup>ふう</sup>と<sup>と</sup>生<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>と</sup>有<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>。下<sup>げ</sup>松<sup>しょう</sup>浦<sup>うら</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>遠<sup>とほ</sup>又<sup>また</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>考<sup>かんが</sup>へ<sup>へ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>。而<sup>しか</sup>に<sup>に</sup>今<sup>いま</sup>の<sup>の</sup>風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>も<sup>も</sup>海<sup>うみ</sup>と<sup>と</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>と</sup>同<sup>どう</sup>し<sup>し</sup>。松<sup>しょう</sup>浦<sup>うら</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>又<sup>また</sup>属<sup>ぞく</sup>や<sup>や</sup>五<sup>ご</sup>條<sup>じょう</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>。今<sup>いま</sup>の<sup>の</sup>三<sup>さん</sup>邦<sup>ぱう</sup>の<sup>の</sup>高<sup>たか</sup>船<sup>せん</sup>入<sup>い</sup>津<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>都<sup>と</sup>會<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>亦<sup>また</sup>風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>也<sup>なり</sup>。

肥<sup>ひ</sup>後<sup>ご</sup>青<sup>せい</sup>國<sup>こく</sup>の<sup>の</sup>風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>の<sup>の</sup>大<sup>おほ</sup>狝<sup>けん</sup>肥<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>亦<sup>また</sup>風<sup>かぜ</sup>俗<sup>じやく</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>也<sup>なり</sup>。



と遊るふ。而も一なる。武士は風俗の肥美を好む。と  
柔なる。然れども千之土地。元来を安んずる。合する  
よりよとあるべし。但智あるものなり。各列を以て  
するもの。一和せず。肥美なるを考むるとぞ。

○按小尚も夫もなる。在海岸も山中亦夥し  
河蕨末麻も各列の玉の中より。在暖温の玉より  
民俗本も不詳なり。上下とも此の方のある國なり。と  
人々も美しとみむ風なり。さる不依て嬢婦と娶入贅

るどころ者。の座より列を以て取らせり

日向 常國の風俗の無法。無法のこのと。抄述の玉を以

夫も不依て。この理ととも。因に。地と云人あり。つと。さ  
て。用ひ。只千。理地。の才。二。ありて。其。後。と。る。人。を。口。海。ふ  
及ひ。終。り。付。果。と。の。終。る。風。也。然。れ。は。偏。卑。の。あ。ま。は  
し。れ。り。人。倫。の。乃。理。と。不。知。と。歎。及。れ。也。なり。唯。死。す  
る。を。以。て。苦。と。す。り。る。也。と。風。俗。也。と。い。ふ。

○按又尚もこの風を海濱おなり。又山中深き玉を以



大隅常國の風俗

大隅常國の風俗は、是も死を以て表す。男ある者  
の死とる方とある。是方は一版外の事と誓ふ。死法の  
死後の作法は、生死のみよ、世と自らして、主  
下此他法もあてず。主とつゝ名をこと知。縁とあて  
主とあて。百姓の地、死の事、是て。それの死、葬て云  
又不足する。戦場はあて死するも。忠義の節、去  
の云、主と。戦は、死と、後、死、この事、是

秦平仕、主、人、死、度、と、不、佐、若、勢、を、あ、ら、い、の、是  
との、主、佐、難、決、と、り、お、の、り、月、と、あ、れ、未、代、と、も  
け、風、う、る、と、も、

○ 按、又、高、山、を、後、あ、ら、い、海、中、へ、と、り、あ、ら、い、る、り  
掬、子、傳、を、久、崎、と、り、南、海、の、又、傳、け、は、又、属、す、也  
暖、ふ、る、り、氏、俗、本、ま、は、洋、を、り

薩摩常國の風俗、大隅、亦、も、遠、り、ち、と、り、也、を

○ 按、又、高、山、を、後、あ、ら、い、海、中、へ、と、り、あ、ら、い、る、り



あ海と受らる四と執る長良海丸海などい人  
き海皆あまの隸ちる琉球もあ必又附庸は四  
町の守は多し一民は本書にいつるごとく別強を  
生ぜ今此世よりまを我ちる。あ床の上  
病死するは憾なくして殺伐の場は死は遂々とい  
て申えし。孫もこれと名をせり。假令の  
兎の戯海よりても少の考と恥辱を其  
又これと死とともむ。死のあはれをこれと  
日本四十八

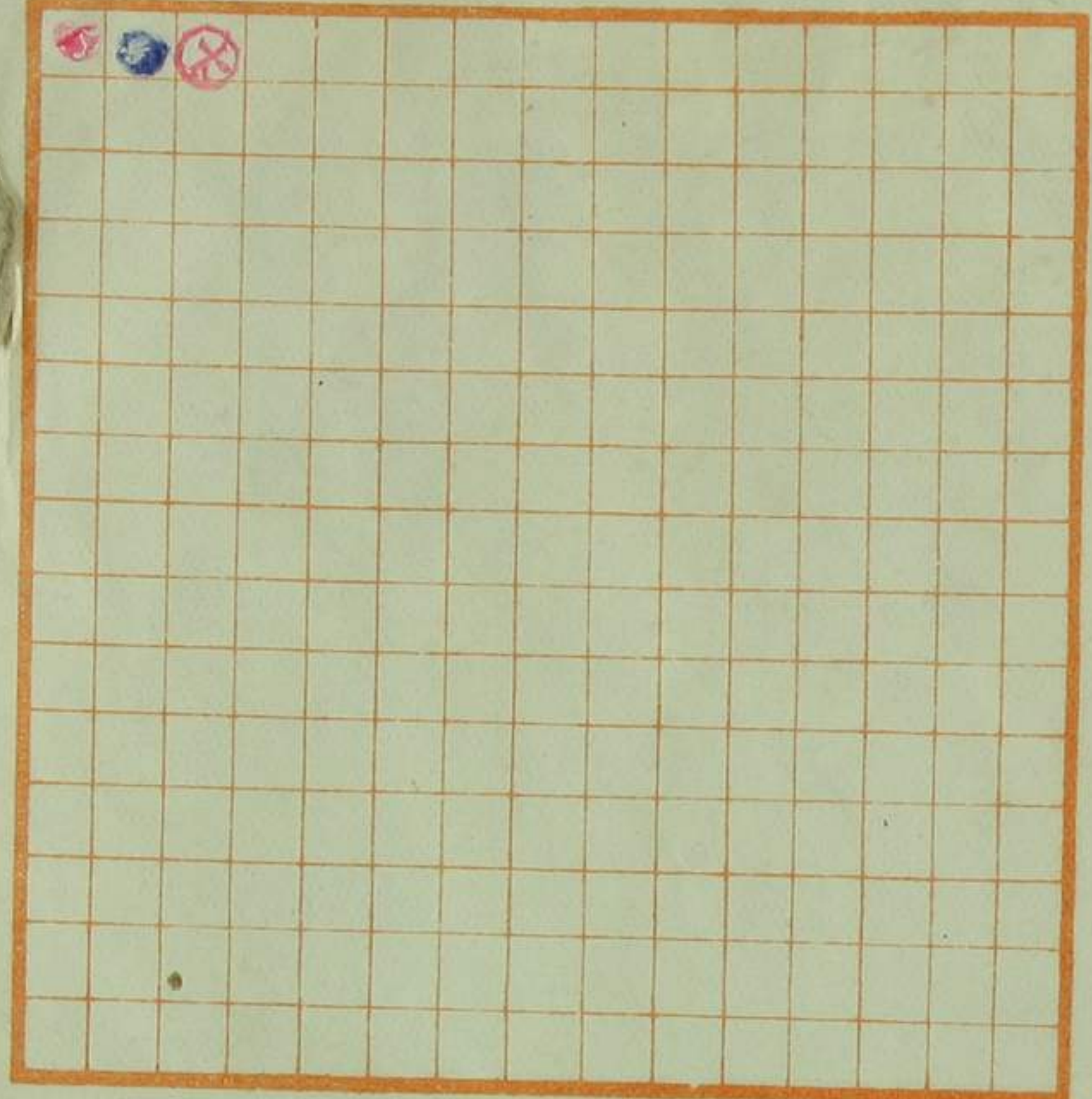
死と思はるるへ。常猛なれども理屈と執をせざる  
る遠慮なくとや。海への風俗むぶとせめぬ  
壹岐 尚國の風俗は遠海なれどもおの花奢るる  
大隅 薩摩より。とらへてはなれり。人の事柔弱  
知れり。実ある事もなりとぞ

對馬 常國の風俗壹岐と同風なりとぞ

○按にまは對する支國とも肥前のおのふ高  
たら海中に傳ちる周匝皆海と。何もしもは



4年9月



を肥后名古屋を去り十三里。對するは彼の勝浦より四十八里。乾の方あり。皆少よれる國。旅室なり。對するは殊々室國を指す。是も朝鮮の通路。海航又四十八里あり。

○朝鮮八道の風土人氣風俗ハ海外性氣録ニ  
はまむくふりす

國郡 日本性氣録 終  
風土



を肥後名古屋を去り十三里。對するは彼の勝浦より四十八里。乾の方あり。皆少よれる國に對するは。是も朝鮮の通路。海航又四十八里あり。

○朝鮮八道の風土人氣風俗ハ海外性氣録ニ  
はまむくふりす

國郡 日本性氣録 終  
風土



